

写本アンソロジーから Sammelband へ*

—「作品集」誕生への胎動を観察する—

向井 毅

1. はじめに

活版印刷の誕生を革命とみなして両文化の差異に注目するよりも、印刷文化を写本時代からの緩やかな継続的發展であるにとらえる研究の必要性は、早くも半世紀前にビューラー (Curt F. Bühler, *The Fifteenth-Century Book: The Scribes, the Printers, the Decorators*, 1960) により指摘されていました。こうした観点にたつて、写本作成の手順が初期印刷本の作業工程に受けつがれていることに気づくと、初期刊本の編集・出版に関する技術面からの研究が精力的に推し進められ、著しい成果を得たことはよく知られるところです。翻って今日のシンポジウムのテーマである〈書物を綴じる形態〉に関して言えば、刊本それぞれは個別に出版され、自己完結している存在という近代の書物観にとらわれた私たちは、それらを束ねる「合冊集」(Sammelband) の存在の意味に十分に気づいてこなかったというのが実情でしょう¹。

そこで今回の発表では、次に述べる2つの課題を掲げ、活版印刷揺籃期の出版事情を略述してみたいと考えます。

第1に、中世の写本コテックスとウィリアム・シン (William Thynne) 編集の『チャースー作品集』(1532年) やパーシー (Thomas Percy) の『古謡拾遺集』(1765年) などの刊本作品集との間に印刷本の「合冊集」を置き、近代の「作品集」誕生にいたる隠れたリンクを確かめる。

第2に、印刷家は、好みにより「合冊集」を作成し、保存する顧客の購入態度を想定する一方で、「作者」を意識した編集・出版活動を展開し始めていたことを指摘する。そして活版印刷における「作者」の誕生が中世の写本文化のなかにすでに胎動していたことをシャリー (John Shirley) の写本編纂を通して観察する。

この2点です。

2. Sammelband—「写本的」印刷文化の産物

合冊集を対象とした本格的な研究は、ニータム (Paul Needham) が1986年出版の *The Printer & the Pardoners: An Unrecorded Indulgence Printed by William Caxton for the Hospital of St. Mary Rounceval, Charing Cross* において一部写本を含む初期印刷本から構成される37の現存合冊集を記述したことに始まります。この研究書をまとめるきっかけは、調査対象の合衆国会図書館所蔵の“Rosenwald (Lessing J.) Sammelband”が4つのキヤクストン出版物を綴じ合わせ、しかも製本に未確認のキヤクストン「免罪符」を使用していたことでした。

キヤクストン版4作品 (1481, 1480, 1481, 1479) と1つの免罪符 (type 4, used between 1480 and early 1484)

Bound by John Reynes, ca. 1535; formerly bound by Caxton's bindery.

Contains printer's waste and bookseller's waste²

1. *The Mirror of the World*, 1st edn. 1481.
2. *Dicts and Sayings of the Philosophers*, 2nd edn. 1480.
3. *Cicero. Of Old Age* (etc). 1481.
4. *Cordiale of the Four Last Things*. 1479

[5. Indulgence. Hospital of St. Mary Rounceval (Fragmentary: printer's waste) 1480.]

興味ぶかいことに、Rosenwald Sammelbandの見返しページに記された手書きの「目次」(写真 [1] 参照) が示すように、「合冊集」という形態が“book”と呼びならわされ、またそこに収められた作品は“work”と称されていたことがわかります。ここには、徳永聡子氏が紹介されたムアア主教 (Bishop Moore) の Sammelband と同様、キヤクストン初期の印刷物が綴じ合わされています。しかも Rosenwald Sammelband には、キヤクストン工房から出た廃棄紙 (waste paper) が製本の際に使用されていて、このような合冊本がキヤクストン工房内あるいはその周辺で綴じ合わされ、顧客に売り渡されていた可能性が浮かびあがってきます。つまり、折々に購入したものを集め、一冊にまとめる読者の慣習を想定した出版活動に加え、印刷家は顧客の求めに応じて合冊本をも制作していたという、需要と供給の関係が推測されます。

In this boke be contey[ned] thise works

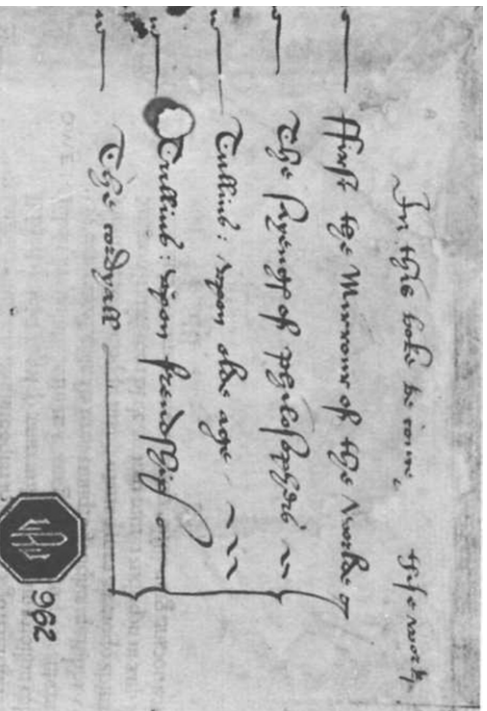


写真 [1] (Rosenwald Sammelband 「目次」の一部)

「合冊集」に対応する形態として、写本時代にはミセラニーやアンソロジーと称されるコレクションがありました。チヨースーサーが描いたベースの女房の夫ジャンキンが所有するのは、悪女や反女性論の話をテーマとした写本のアンソロジーであり、彼はこのような話を扱った多くの「本」(“books many on”)を一冊に綴じて所有(“And alle thise [books] were bounden in o volume”(Canterbury Tales, “Wife of Bath’s Prologue”, 681))していたとチヨースーサーは書物のつくりを説明しています。またジャンキンは暇ができるとこの「本」(“this book of wikked wyves”(685))を読むのが習慣であったとも語られています。

写本の場合、まずは作品を集めたコテックス(冊子体書物)が存在し、そこからそれを構成する単位であるブックレット(‘booklet’)やフアシクル(‘fascicle’)という書物形態の発見に至りました³。しかし刊本の場合、冒頭にも述べましたが近代の書物観の影響のもと、まずは個々の出版作品が存在すると錯覚し、それらが全体の部分を構成する、合冊本の存在には思い至りませんでした。合冊本を、レーラー(Seth Lerer)の物言い(“medieval” print culture)に倣って⁴、「〈写本的〉印刷文化の産物」と呼ぶことが可能なのはこうした経緯からでしょう。また、初期印刷本に「タイトルル・ベージ(標題紙)」が考案され、ラベル・タイトルルからフル・タイトルルへと発展し、書物の巻頭を詳細な情報と挿絵で飾るまでには時間を要しました⁵。各作品が個別単独に製本されて流通するの

ではなく、読者の手により個人的なコレクションとして綴じ合わされる受容形態がタイトル・ページの発達を遅らせたことは否定できません。

印刷家は、写本文化の流れをくむ、合冊本を前提にした出版活動と平行して、〈作者名〉を意識した編集・出版活動を新しく進行させていました。チャーサーの出版物を例にとって考えてみましょう⁶。

印刷家	作品標題	出版年
Caxton	<i>Canterbury Tales</i> , 1st edn.	1477
	<i>Canterbury Tales</i> , 2nd edn.	1483
	<i>Boethius</i>	?1478
	<i>The House of Fame</i> .	1483
	<i>Queen Anelida and false Arcyte</i>	?1477
Pynson	<i>Parliament of Fowls</i>	?1477
	<i>Troilus and Cressyde</i>	1483
	<i>Canterbury Tales</i> .	?1492
	<i>Canterbury Tales</i> .	1526
	<i>The House of Fame</i>	?1526
(with <i>Parliament of Fowls</i> and some other poems)		
de Worde	<i>Troilus and Cressida</i>	?1526
	<i>Canterbury Tales</i> .	1498
	<i>Parliament of Fowls</i>	1530
Rastel	<i>Troilus and Cressida</i>	1517
	<i>Parliament of Fowls</i>	?1525
	<i>The Works of Geoffrey Chaucer</i>	1532
Anr. edn.	R. Grafton (1542)	
[A variant]	J. Reynes (1542), R. Kele (?1550), T. Petit (?1550), R. Toye (?1550)	
Anr. edn.	W. Bonham (?1550)	
Stow/Kyngston	<i>The Works of Geoffrey Chaucer with diverse additions with the Siege of Thebes, compiled by J. Lydgate</i>	1561

シンの1532年版『チャーサー作品集』が登場する前に、私たちの興味を引くのは1526年のピンソン (William Pynson) による一連のチャーサー作品の出版活動でしょう。特定の著者名のもとに作品を集め、出版すること。それは、書き

もの（テクスト）を一人の書き手の所有物として認める、組織的な文化的態度のはじまりです。しかしピンソンの場合、チヨースーの名前を意識して編集するものの、顧客の手により一つに束ねられることをも想定して、『カンタベリ物語』『トロイラスとクリセイダ』『名声の館、鳥たちの議会』[ほか小品]を、分冊の形で出版した点で、中世が近代の書物文化に畳み込まれる直前の姿を示していると解釈できます。いわば、「テクスト指名制」という近代の精神が、合冊本という「写本的」印刷文化の衣装をまとい、現れた姿だと言えるでしょう⁷。

3. シャーリーとテクスト指名制

松田隆美氏が詳細に述べられた中世写字生の伝統的な本文意識の流れと、「テクスト指名制」の端緒をひらき近代に向かう流れとが交差する地点に立つのが写本編纂者シャーリー（John Shirley, 1366-1456）だと考えます⁸。シャーリーは長らくウオリック伯リチャード・ビーチャムの書記の仕事につき、60歳を過ぎて職を退いて後、写本の編纂をはじめました。その大部な写本アソシエーションが3つ現在に伝わっています。BL Additional 16165、Cambridge Trinity College R.3.20、Oxford Bodleian Library Ashmole 59です。写本はリドグイトとチヨースーの小作品を中心に構成され、大英図書館写本は1420年代、トリニティ写本は1430-32年の間に、ボドリー図書館アシュモール写本は80歳を過ぎた1440年代後半に、それぞれ作成されたと推定されています⁹。彼のテクスト編集にもっとも顕著なことの一つは、作者の特定と創作にまつわる状況説明を作品に書き添えたことです。作品と作者との帰属関係への傾斜はシャーリー写本にきわだった特色です。ピアスル（Derek Pearsall, 1970）とコノリー（Margaret Connolly, 1998）の研究成果にもとづき、具体例を通して観察してみよう。

チヨースーの小作品“Gentillesse”は、たとえばキヤクストン版の *Temple of bras* つまり *Parliament of Fowls* に見られるとおり、スコークン（Henry Scogan）の“Moral Balade”の本文の中に埋め込まれた形で、流布していたことが知られています。現在、“Gentillesse”は10の写本と3つの初期印刷本で読むことができます。

“Gentillesse”の現存テクスト

Oxford Bodley Ashmole 59, BL Additional 22139, BL Cotton Cleopatra D.VII, BL Harley 2251, BL Harley 7383, BL Harley 7578, Coventry City Record Office Coventry, Nottingham Univ. Library Me LM 1, Cambridge Trinity College R.3.20, Cambridge Trinity College R.14.

51; Caxton's 1477 edition of *Temple of bras*, Stowe's 1561 edition of *Chaucer's Works*, Thynne's 1532 edition of *Chaucer's Works*.

このうち4写本に何らかの題名が付され、そのうち著者の名を明記しているのは、Trinity写本と Ashmole写本、それに Harley 7333写本('Moral Balade of Chaucier'この写本はシャーリー写本から派生したと考えられる。)の3つであり、いずれもがシャーリーが関係した写本です。(ただしシャーリー写本にもとづくストウ版には、'A balade made by Chaucer, teching what is gentilles, or whom is worthy to be called gentil'の題目がつけられている。)

Trinity写本と Ashmole写本により確かめてみましょう。Trinity写本 (p. 358) においては、"Gentillesse" は単独で書き写され、「チヨーサーが死の床に伏して作った」とシャーリーが興味ぶかい創作背景を説明する "Truth" (p. 357) のすぐ後に配置されています。写本上部にある欄外見出し (running head) と作品の題名 (rubric) には、"Balade by Chaucier" が記されています。一方、Ashmole写本ではスコークソンの詩の中に組み込まれています。しかし写真[2]に見るように、該当箇所 (f. 27) 欄外余白には 'Geffrey Chaucer made pese three balades next þ' folowen' [i.e., "Gentillesse," "Fortune," "Complaint of Venus"] の書き込みが添えられているのです。

Ashmole (as marginalia): 'Geffrey Chaucer made pese/thre balades next þ' folowen'

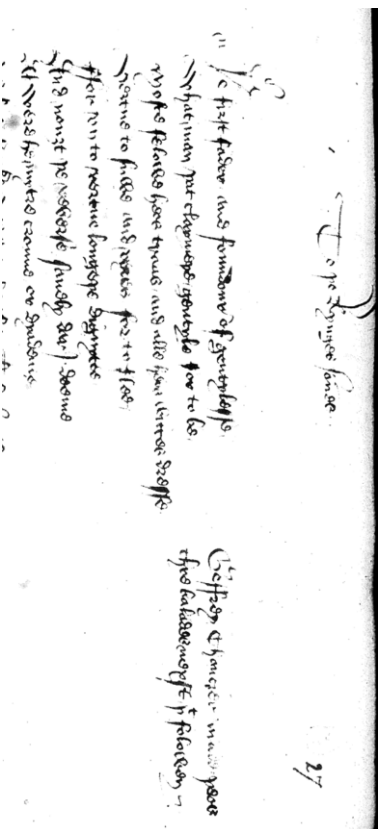


写真 [2] Ashmole 写本 (f. 27')

同様に、チャソーサー “Fortune” を観察してみましょう。“Fortune” のデクストは10の写本と3つの初期印刷本に現存しています。

“Fortune” (Ballades de village (an error for ‘visage’) sanz peinture) の
現存デクスト

Oxford Bodley Ashmole 59, Oxford Bodleian Library Bodley 638,
Oxford Bodleian Library Arch. Selden B. 10, Oxford Fairfax 16, BL
Harley 2251, BL Lansdowne 699, Leyden Univ. library Vossius 9,
Cambridge Uni. Library II 3.21, Cambridge Magdalene College Pepys
2006, Cambridge Trinity College R.3.20 ; Caxton’s 1477 edition of
Temple of bris, Thymne’s 1532 edition of *Chaucer’s Works*, de Worde’s
1515 edition of *Proverbes of Lydgate*.

運命の流転を嘆く男と女神との間で交わされるこの問答歌は、ホエテイウスの『哲学の慰め』の思想と形式のもと、フランス詩人デュシヤン (Eustache Deschamps) やラシヨール (Guillaume de Machaut) からの直接の影響がこれまで論じられてきました。フランス詩との関連に気づき、こうした材源の問題にいち早く言及したのがほかならぬシャーリーです。Ashmole 写本において、この詩はフランス語からの翻訳であると彼は断定しています。

シャーリー写本にとってより重要なのは、リドゲイトの作品です。もともと早く編纂された BL Additional 16165写本において、リドゲイトの手になるものとして28作品が取りあげられています。また、Trinity と Ashmole の両写本に現れ、かつ Ashmole 写本においてリドゲイト作として特定されることにな

Ashmole: ‘Here foloweþe nowe a compleynt of þe Pleintyff ageint
ageint fortune translated oute of Frenshe in to Englishe by þat famous
Rethorissyen / Geffrey Chaucier’

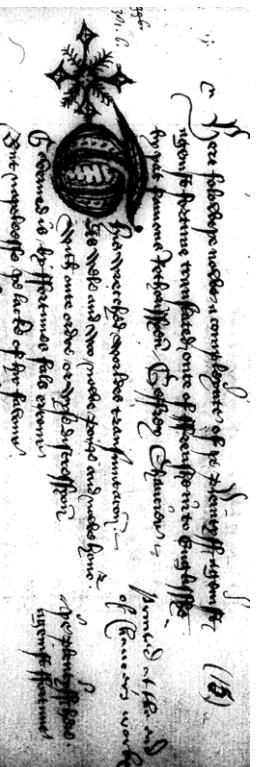


写真 [3] Ashmole 写本 (f. 37r)

る作品が2つ(“A Holy Meditation”, “Complaint for My Lady of Gloucester and Holland”)あり、さらに Ashmole 写本にのみ伝わる1ドレイト作品が4つ確認されます。

たとえば “A Holy Meditation” について言えば、Trinity 写本では一連のフランス語短詩の後、チャーサーの名を特定した小見出し (rubric) に導かれて *Aneida and Arcie* が続き、そのすぐ後に “A Holy Meditation” が置かれています。

Trinity: ‘Now here filowepe an holy medytacion’

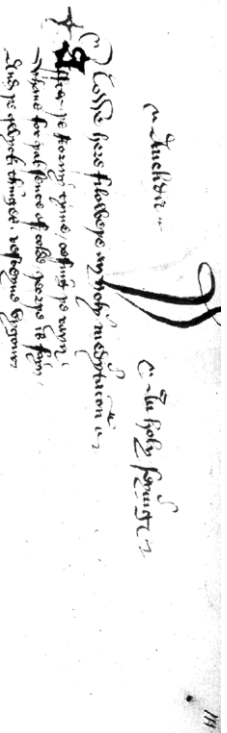


写真 [4] Trinity 写本 (p. 111)

写真 [4] の Trinity 写本に見るとおり、この詩を導く小見出し ‘Now here filowepe an holy medytacion’ には著者名が明記されていません。このページの欄外見出しも同様です。見出しの左半分には誤って *Aneida* が、右半分にはこの詩を指し示す ‘An holy seyrge’ が書かれています。後に続くページの欄外見出しにも作者への言及はありません。

一方、Ashmole 写本の場合、写真 [5] に示したとおり、作品の前に置かれた ‘Here nowe folowepe an holy meditacion. made by be Religious man

Ashmole: ‘Here nowe folowepe an holy meditacion. made by be Religious man Lidegate daun Iohn/ be Munk of Bury’

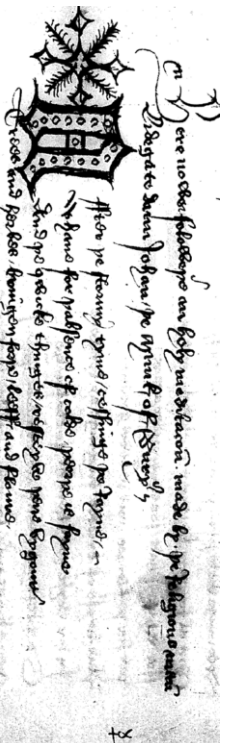


写真 [5] Ashmole 写本 (f. 49)

Lidegate daun Iohn/ be Munk of Bury' (f. 49^v) の小見出しには、ベリー・セント・エドモンド (Bury St. Edmund) の修道士リドゲイトにより作られたことが明記されています。

編纂者シャーリーにとつて、作者に作品を帰属させることでは、チャーサーとリドゲイトに違いはありません。しかしリドゲイトの場合、シャーリーにとつては同時代人であり、かつまた身近な交流の可能性も想像しうる関係にあつたと言われています。そこには、令名をとどろかせる詩人の作品とその創作状況を、写本編集者として収集し書きとめ、結果として近代の作品編集のさきがけとなるテクスト編集家としての姿と、いま一つはリドゲイトを友人として敬愛するブライベートな姿を垣間見ることができます。こうした態度が反映されていると解釈することが可能な作品があります。それをコノリーの推論をもとに紹介したいと思います¹⁰。

それはいま一つの作品 "Complaint for My Lady of Gloucester and Hol-land" です。(今日、この作品はリドゲイトが創作したとの決着をまだみえていない。) リドゲイトの最大の庇護者はグロスター侯ハンフリー (Humphrey, Duke of Gloucester, 1390—1447; 5th son of Henry IV) でした。1422年、オラン

Trinity: 'Here bygymneþ a complaynte of a solitarie persone compleyng pabesence of þe mooste renommed and best beloued pryncesse pat euer of hire estate in þeos dayes came in to þis reauune of Logres by þe weye of marriage and so sodeynly vnordynatly departed heis, as hit is sayde and spoken in many regyouns by þe hygheste estates þer.'

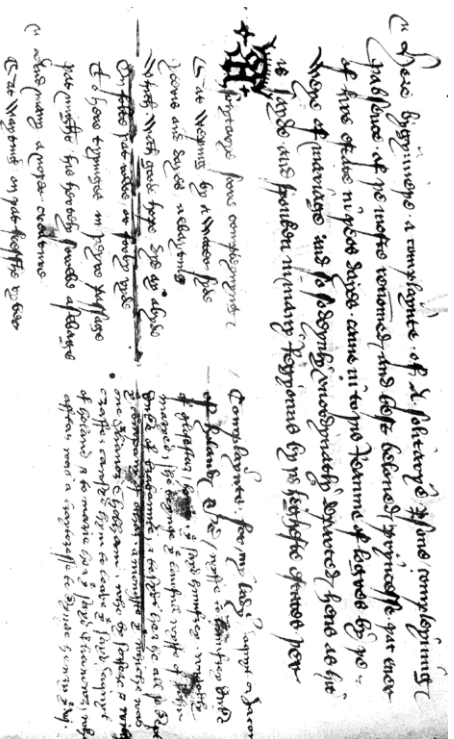


写真 [6] Trinity 写本 (p. 363)

Ashmole: 'Now endep here be vyce of verbum caro factum est and nexst foloweþ / a pytous complaynte of a Chapellayne of my lordes of Gloucestre Humfrey &c. whome gode assayle þat noble pryncce.'

Marginalia: 'Lidgate daun lhan'

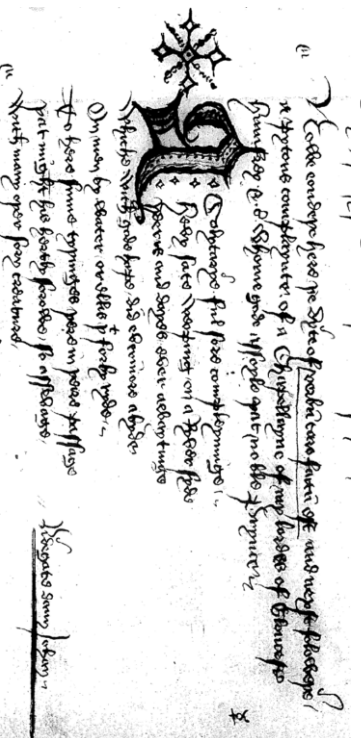


写真 [7] Ashmole 写本(571)

タおよびエノー伯爵の一人娘ジャクリーン (Jacoba or Jaqueline, countess of Holland and Hainault) と結婚します。ジャクリーンは1420年、政治的陰謀から逃れるべく2番目の夫ジョン (John, Duke of Brabant) を捨ててイングラントに避難しており、グロスター侯は彼女に援助の手を差しのべ、バーガンディ地方の領土拡大をねらいました。結局、結婚は無効となり、グロスター侯は彼女を捨てジャクリーンの侍女コバーン (Eleanor Cobham) と結婚します¹¹。この出来事に当時の社会に非難と同情が渦巻いたことは言うまでもありません。ジャクリーンの上を嘆き歌われたのがこの詩です。

作品の見出しを Trinity 写本と Ashmole 写本で比べてみましょう。まだうわさが消えない頃に編纂された Trinity 写本(写真[6])のテクスト見出しには、作者の名が書き控えられ、この事件から15年ほど経過して作成された Ashmole 写本(写真[7])の見出しにはグロスター侯の司祭がジャクリーンを嘆くこの詩を作った、と記されています。司祭とはリドゲイトをためらいながら指す言葉であり、躊躇のすぐ後、思い直したのでしょうか、テクスト欄外に 'Lidgate daun lhan' を書き入れています。

4. まとめ

中世後期、ガワーンが『恋人の告白』に先人オウアイウスと同等の功績を求め、チヨーサー自身も『トロイラスとクリセイダ』がヴァエルギリウス、オウアイ

デイクス、ホメロスら先人の作品に比肩することを望みました¹²。個性的創造者としての作者の出現とテクスト私有化のめばえに対して、シャーリーに代表される写本作成者、つまり読者の代表もこうした作者の動きに応答し、作者と編集者の新たな関係が築かれはじめました。この関係こそ作者の名を冠した印刷本作品集の出版につながることになるのだと考えます。

注

* 本稿は、日本中世英語文学会第21回全国大会（2005年12月4日、筑波大学）において行われたシンポジウムⅡ「チャーサーとその周辺—写本アンソロジーから Sammelbande」のために準備した原稿を、語り口をほぼそのままに印刷に付したものである。拙稿を除く講師とその発表題は次のとおりであった。徳永聡子（司会・講師：日本学術振興会特別研究員）「15世紀イングランドにおける教訓詩 miscellany 写本の特性」、高宮利行（デイクスカッサント：慶應義塾大学）。なお、松田隆美氏の発表はその後、「中世英語の宗教学写本における compiliatio と ordinatio—Bol. Libr. MS Douce 322 を中心に」（飯田隆編『西洋精神史における言語と言語観—継承と創造』慶應義塾大学出版、2006、pp. 283-303）として公刊されている。

1 中世英文学の作品受容を書物の形態論の立場から究明する動きは近年盛んになり、たとえば、*The Yearbook of English Studies*, vol. 33 (2003) は「Medieval and Early Modern Miscellanies and Anthologiesの特集を組んでいる。Sammelband（「合冊集」とは、顧客が購入した書物を自らの好みに応じて合冊・製本したものを指すと定義されるが、あらかじめ出版業者が合冊されることを想定したうえで書物の選択・出版をおこなっていることを忘れてはならない。カーターとパーカーでは次のように説明されている。

‘A German word for books in which two or more bibliographically distinct works are bound together within the same covers. The practice itself, common in the Middle Ages, was carried over into the Incunabula period, and books still exist in which manuscript and printed works coexist ...’ John Carter and Nicholas Barker, *ABC for Book Collectors*, 8th edn (London, 2004), p. 195.

2 “Tract Volume,” No. 8, in Paul Needham, *The Printer & the Pardoner. An Unrecorded Indulgence Printed by William Caxton for the Hospital of St. Mary Rouncival, Charing Cross* (Washington, DC: Library of Congress, 1986), pp. 71-2.

3 ‘booklet’とは Pamela Robinson が提案し Ralph Hanna III が再定義した用語であり、「1つのテクストを収め、複数の折丁で成りたち、かつ自立した最小の写本構成単位」のことである。Pamela Robinson, ‘The ‘Booklet’: A Self-Contained Unit in

- Composite Manuscripts', *Codicologica*, 3 (1980), 46-69および Ralph Hanna III, 'Booklets in Medieval Manuscripts', in *Pursuing History: Middle English Manuscripts and their Texts* (Stanford, 1996), pp. 21-34を参照。
- 4 Seth Lerer, 'Medieval English Literature and the Idea of the Anthology', *PMLA*, 118 : 5 (2003), 1251-67参照。
- 5 タイトル・ページの発達に関しては、Alfred W. Pollard, *Last Words on the History of the Title-Page with Notes on Some Colophons and Twenty-Seven Facsimiles of Title-Page* (1891) の先駆的仕事を始まりとして次のような研究がある。Rudolf Hirsch, *Printing, Selling and Reading* (1974) ; Martha M. Driver, 'Ideas of Order: Wynnyn de Worde and the Title-Page', in *Texts and Their Contexts*, eds. by J. Scattergood and J. Boffey (1997) ; Gerard Genette, *Paratexts*, tr. by Jane Lewin (1997) ; Margaret Smith, *Title-Page: Its Early Development 1460-1510* (2000).
- 6 *A Short Title Catalogue of Books Printed in England, Scotland, & Ireland and of English Books Printed Abroad 1475-1640*, 2nd edn. 3 vols. (London : 1986-1991) 参照。
- 7 テラストが著者の名と強く結びついたことにより、著者名が作品の流通を制御する道をひらく。チヨースーサーの名が権威を持った結果、16世紀初頭多くのチヨースーサー・アボクリフが生まれた。印刷家キャクストンがチヨースーサーとのつながりを演出するため、ウェストミンスターにチヨースーサー記念碑を建立した出来事については、D. R. Carlson, 'Chaucer, Humanism and Printing: Conditions of Authorship in Fifteenth-Century England', *University of Toronto Quarterly* 64 (1995) を参照。
- 8 イギリスの出版史上において、作家が植字工らによるテラスト参加を監視し、印刷家と連携をとりながら作品の出版を行った最初の例は、キャクストンの時代を経て、ホウズ (Stephen Hawes) がト・ウオードの印刷所から出版した『美德の範 (*Example of Vertu*)』(? 1504年)であった。作者が個性的創造力を主張し、その名前がテラストと強く結ばれる。そして著者名と不可分になったテラストが印行され、作品というモノとなって出版される。シャーリーは作品に作者の名を冠し、創作コンテラストを付した。組織的な編集としては初めての営みである。編集・出版人としてのシャーリーの活動を著作意識のこうした流れのなかで眺めるとき、名前とテラストとを強く結びつけた点で、彼の果たした役割の大きさが現れてくる。フーコーの言葉づかいを借りれば、シャーリーはテラストに著者をもたせ、テラストの流通を制御したりテラストに権威をあたえたりすることを目指す「テラスト指名制」の確立をささげたことになる。
- 9 Margaret Connolly, *Joh Shirley: Book Production and the Noble Household in Fifteenth-Century England* (Aldershot: Ashgate, 1998), p. 150.
- 10 See Connolly, pp. 81-2.
- 11 *Dictionary of National Biography on CD-ROM* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1995).

- 12 Alastair Minnis, *Medieval Theory of Authorship: Scholastic Literary Attitudes in the Later Middle Ages* (London: Scholar press, 1984) を参照。

参考文献

- Boffey, Julia, and John J. Thompson, 'Anthologies and Miscellanies : Production and Choice of Texts', in *Book Production and Publishing in Britain 1375-1475*, ed. by Jeremy Griffiths and Derek Pearsall (Cambridge: CUP, 1989), pp. 279-315
- Brusendorf, Aage, *The Chaucer Tradition* (London : Oxford University Press, 1925)
- Bühler, Curt F., *The Fifteenth-Century Book: The Scribes, the Printers, the Decorators* (Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 1960)
- Carlson, D. R. 'Chaucer, Humanism and Printing: Conditions of Authorship in Fifteenth-Century England', *University of Toronto Quarterly* 64 (1995), 274-88
- Carter, John and Nicholas Barker, *ABC for Book Collectors*, 8th edn (London : The British Library, 2004)
- Connolly, Margaret, *John Shirley: Book Production and the Noble Household in Fifteenth-Century England* (Altershot : Ashgate, 1998)
- The Minor Poems of Geoffrey Chaucer*, Part 1, ed. by George G. Pace and Alfred David (Norman : University of Oklahoma Press, 1982)
- Dane, Joseph A., Gillespie, Alexandra, 'Back at Chaucer's Tomb : Inscriptions in Two Early Copies of Chaucer's Workes', *PBSA*, 52 (1999), 89-96
- Doyle, A.I., 'A Survey of the Origins and Circulation of Theological Writings in English in the Fourteenth, Fifteenth and Early Sixteenth Centuries with Special Consideration of the Part of the Clergy Therein' (unpublished doctoral dissertation, University of Cambridge, 1953)
- Doyle, A. I., 'More Light on John Shirley', *Medium Aevum*, 30 (1961), 93-101
- Edwards, A. S. G., 1991 'From Manuscript to Print : Wynkyn de Worde and the Printing of Contemporary Poetry', *Gutenberg Jahrbuch*, 143-48
- Gillespie, Alexandra, 'Caxton's Chaucer and Lydgate Quartos : Miscellanies from Manuscript to Print', *Transactions of the Cambridge Bibliographical Society*, 12.1 (2000), 1-25
- Gillespie, Alexandra, 'Poets, Printers, and Early English Sammelbände', *Huntington Library Quarterly*, 67.2 (2004), 189-214
- Gillespie, Vincent, 'Anonymous Devotional Writings', in *A Companion to Middle English Prose*, ed. by A. S. G. Edwards (Cambridge : D.S. Brewer, 2004), pp.127-49
- Gillespie, Vincent, 'Vernacular Books of Religion', in *Book Production and Publishing in Britain 1375-1475*, ed. by Jeremy Griffiths and Derek Pearsall (Cambridge

- ge: CUP, 1989), pp.317-44
- Hanna, Ralph III, *Pursuing History: Middle English Manuscripts and Their Texts* (Stanford, CA: 1996)
- Lerer, Seth, 'William Caxton', in *The Cambridge History of Medieval English Literature*, ed. by David Wallace (Cambridge : Cambridge University Press, 1999), pp. 720-38
- Lerer, Seth, 'Medieval English Literature and the Idea of the Anthology', *PMLA*, 118 : 5 (2003), 1251-67
- Lerer, Seth, 'Medieval Literature and Early Modern Readers : Cambridge University Library Sel. 5. 51-5.63', *PBSA*, 97. 3 (2003), 311-32
- The Minor Poems of John Lydgate*, 2 vols., ed. by Henry Noble MacCracken (London: Oxford University Press, 1911)
- Mukai, Tsuyoshi, 'Richard Pynson's 1526 Edition of *The Parment of Fowls*: Textual Editing from Multiple Sources', *Poetica*, 49 (1998), 49-62
- 向井 毅 「刊本揺籃期のタクトル・ベーズ」 *The Directory of Conscience* (1527、1534) 考察』『鴟門英語研究』、16 (2002)、1-13
- Needham, Paul, *The Printer & the Pardoners: An Unrecorded Indulgence Printed by William Caxton for the Hospital of St.Mary Rouncel, Charing Cross* (Washington, DC : Library of Congress, 1986)
- Parkes, M. B., 'The Influence of the Concepts of Ordinatio and Compilatio on the Development of the Book', in *Medieval Learning and Literature: Essays Presented to Richard William Hunt*, ed. by J. J. G. Alexander and M. T. Gibson (Oxford: Clarendon, 1976), pp. 115-41
- Derek Pearsall, *John Lydgate* (Charlottesville, University Press of Virginia, 1970)
- Robinson, Pamela R., 'The 'Booklet' : A Self-Contained Unit in Composite Manuscripts', *Codicologica*, 3 (1980), 46-69
- Ruggiers, Paul G., ed., *Editing Chaucer: The Great Tradition* (Norman: Pilgrims, 1984)